「不世出の文化外交の達人・芳賀徹　その軌跡を追慕する――海外での交友関係の一端を導きに　追悼　芳賀徹」『図書新聞』3442号　2020年4月4日　8面

追悼 芳賀徹

不世出の文化外交の達人・芳賀徹

その軌跡を追慕する――海外での交友関係の一端を導きに

稲賀繁美

「ハガテンは元気？」「芳賀先生、お元気ですか」。どうしたわけか、会う人ごとにそう尋ねられた。誰からも慕われる人望は、国境を越えていた。「ハガさんが登場すると女性たちがわっと取り囲む。ありゃ何だね？」とはカナダの名物教師だったキンヤ・ツルタの羨望混じりの述懐だった。ヴェネチアでたまたまお会いしたドナルド・キーンさんに芳賀徹の話を振ると、「ああハガさん」と「ハ」にアクセントのある独特の口調で、相好を崩された。旧懐に耐えぬというその表情が、いまも記憶に鮮明である。キーンさんの名著『日本人の西洋体験』の文体に刮目した芳賀は、『文明としての徳川日本』（２０１７）で恩賜賞、日本藝術院賞の栄誉を得た。バブル期の「江戸ブーム」に「徳川の平和」pax tokugawanaを提唱して話題を蒔いたが、これも時流便乗とはほど遠く、確かな文明史的見識の裏打ちがあった。

国内ではまだ浮世絵春画の複製が御法度だった頃のこと。インディアナ大学のスミエ・ジョーンズらと語らって、ブルーミントンで国際学会を企画した。千野香織、田中優子に和服姿の上野千鶴子も揃い踏み。延広真治の通訳にはロバート・キャンベルが付き、ノーマン・ブライソンも馳せ参じた。『大江戸視覚革命』のタイモン・スクリーチや「江戸のブルー革命」のヘンリー・スミスも。超党派・専門領域横断が醸しだした独特の和気藹々の気風が懐かしい。国際比較文学会の東京大会をバブル末期の東京で１９９１年に実現したのも、実行委員長・芳賀の人柄、国際的信頼の賜物だった。多忙を理由に惜しくも会長への就任は辞退したが、世界中どこに招かれても、和英仏語に何ら不自由なく論談風発を楽しむ明るい社交性は稀有の天稟であり、内向き・口下手な島国人の枠を逸した「国際人」だった。

意識

そこには占領期を脱してすぐに、いち早くフランス政府給費留学生として渡欧した経験が無視できまい。占領下日本の情報検閲から解放されたパリで、芳賀青年は画家マティスの娘婿ジョルジュ・デュテュイに気に入られ、アンフォルメルの騎手となるミッシェル・タピエらと親交を結び、吉原治良率いる「具体」を世界に売り出す契機をも担った。ポンピドー・センターでは１９８６年に『前衛の日本』と題する大規模な回顧展が開催されたが、その折にも大活躍を見せた盟友、ジャン＝ジャック・オリガスの没後には『物と眼――明治文学論集』（２００３）刊行にも尽力した。世界に広がる交友網は縦横無尽で筆舌に尽くし難い。

造形作品と詩歌の鑑賞とを自在に交叉させ、もてる才能を遺憾なく発揮した。日経新聞連載の『詩歌の森へ』（２００２）は「日本詩へのいざない」として最良の手引として残るだろう。『与謝蕪村の小さな世界』（１９８６）では「籠り居の詩人」のintimitéに目配せする一方、「稲づまや浪もてゆへる秋津しま」の「衛星画像」顔負けの気宇壮大な鳥瞰visionにも注目した。この「宇宙船」詩観の背後には、蕪村を同時代の啓蒙の哲人ヴォルテールと比較し、ポール・アザールの『ヨーロッパ精神の危機』を、鎖国日本に投影する自在な観察眼があった。細かな発見を地球大の構想に難なく結びつける想像力は、さながら天衣無縫。自己の感性への揺るがぬ信頼ゆえの、無手勝流とも称すべき行状だが、その融通無碍は「コチタキ」専門の蛸壺や、特定の理論やイデオロギーに囚われることを潔よしとせぬ、高雅な詩魂あってこその振る舞いだった。

パリ留学時代にはジャンケレヴィッチやメルロー＝ポンティーの講延にも連なり、北米ワシントンでフィリップ・アリエスやフェルナン・ブローデルとも親しく付き合った。そうした豊かな人生経験を糧として芳賀が具現した「悦ばしき学問」は、異分野交雑の座談の席でも、たくまずして即興演奏の妙技を披露した。

若き日の訥弁はいつのまにか自由闊達な滑舌へと変貌し、知的好奇心に溢れた知性は、永遠の青年のまま、八八歳の生涯を全うした。二〇一八年にもパリの日本文化会館でポール・クローデルの国際学会を運営し、没する四か月前に吉田茂夫人・雪子を語ったのが最後の講演となった。

式子内親王や明恵を詩の友とし、蕪村から杉田玄白、平賀源内、福沢諭吉を追体験し、渡邊崋山や高橋由一らの絵心に溶け込み、かれらと時代を超えた同士の如き交わりを結んだ。さらに『米欧回覧実記』の久米邦武の実学精神を再評価して、徳川暗黒史観と明治を専制絶対主義としか見ない進歩史観には義憤を隠さなかった。日本を世界において捉えることを「知的エリート」の矜持として譲らなかった。その集成『外交官の文章』は近く公刊の予定と聞く。この稀有な「文化外交官」は、京都に設立された国際日本文化研究センターを知的国際交流の「不沈空母」に準え、所員は常時パスポートを携え、ひとたび海外から声が掛かれば、間髪をいれず発艦すべしと（聊か危うい）檄を飛ばした。

そこには東アジアの隣人たちとの交友、留学生へのきめ細かな対応の蓄積が裏打ちされていた。人民中国からの留学生には『日本留学精神史』（１９９１）で大佛次郎賞受賞の厳安生、周作人研究の劉岸偉、文藝評論家の張競に至る多彩な人材が集い、韓国からは詩人の金素雲や『縮み志向の日本人』で話題を撒いた初代文化大臣・李御寧、ソウル大学初代の日本専攻主任となった漱石研究の尹相仁、韓国でＴＶ日本語講座の基礎を作った李應壽を始め、多数の知日派文人墨客が、家族ぐるみで水魚の交わりを育み、親密なる星座を形作った。

生前最後の著作は『桃源郷の水脈』（２０１９）。それにちなむ展覧会も実現した果報者の著者は、今や桃源に仙化して、知子夫人との再会を愉しんでいることだろう。国内外様々な機会に同席したが、あの絶妙の「ちゃちゃ」を交えながらの遠慮会釈ない学術的放談は「聴き法楽」だった。そのほんの一端を「放送大学」の番組に録画した。回顧するにつけ、あの春風駘蕩が懐かしい。その至福を真似ようにも、もはや叶わぬことだけが、口惜しい。

さり

君あしたに去ぬ／ゆふべのこゝろ千々に／何ぞはるかなる（蕪村「北寿老仙を悼む」）

米芳賀徹氏は二〇二〇年二月二〇日に、父君・芳賀幸四郎と同じく、米寿にて永眠した。

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教員。放送大学客員教授）